

「砂の降る教室」批評家シシエス／田中隼介

読者のようにだけで勝負に出ている歌が多い（「画面送り」）が、その読者が poor だから場合によっては読者の粗さが目につく（作者が「い」も思っていたころは傍線を引いて出した新川洋子さんのボクヤカに倣って引用）。それは、文章設置との戯れに走るあまり、言葉そのものの楽しみに目が回っていないからではないが、

ちよこつた野いつち

- ・ 目に映れる光欲しくてシムブルをうつてシートの代わりに叩いて
- ・ 塵溜して大口和なり 草原く我も西耳たてて赴く
- ・ 見てしまふ 塵はのくがしんじんと震水の耳響つてくるぞ

言葉の脱臼／じつはもそび／距離するオノオノ

- ・ 大着の「ー」を連れてらりー 二つで四く飛び出す 塵はなるくし
- ・ なじやら口きものが地面を覆ふかな じつはもものををもぎとられたら
- ・ じつじつと距離ある午後と助動詞のじつで野を焚らせてくる
- ・ 入った支離切り直も着くなり 桜をくわく踏むつちま

「も勉強入」は「詩的」をじつまで超えられるか？

》 非詩的価値を記し取れるか

言葉のも勉強

- ・ 桜色の限りを尽くす恋人と連れ立って見に行く天の河（大窪）
- ・ 塵田でて恋歌のたふ明けの夢そなむやかしそ心取れ（佐助詞）
- ・ 一冊以上置ひたる人の特典は真金のじぶり掴め取り（飄近）
- ・ 校門に朱をく／手を塗うたくり、そしてある日の暮れ方の事（芥川）

非詩的と思われるものを取り込むことにより、聖なる詩的空間に砂を降らせること、「詩」す「詩の外」の往復の距離をおもじろがっているものに思えるが、それが「詩の外」じゃなくて半強半強な「詩」であるのも間違たじ、距離をはかり間違えて、はからずも「詩」に着地をせしめたじも間違えていじ歌を書いてしまつたをじつ認むればいじのが、詩をだめにする歌人の「知」の部分が、じつじつ（詩神）に會つてしまつた時、いじものが生まれるじつだ。そんな心のすぎ、余裕

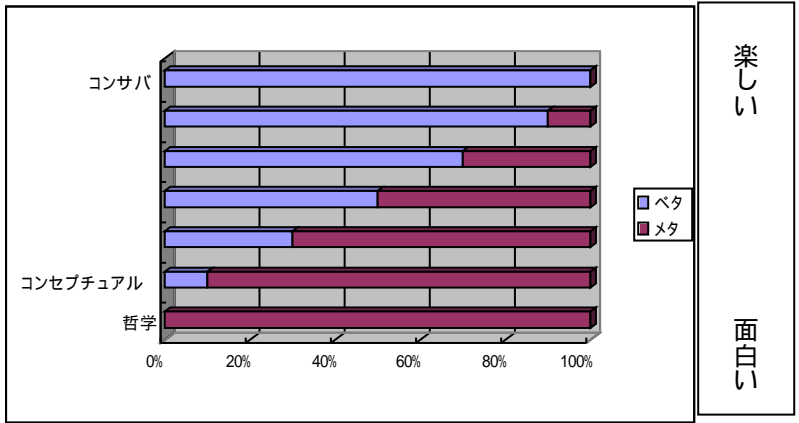
- ・ 飲み金をたつ断わり海上に米する風を投げに行くくし（美神 三ノ一）
- ・ 風はつち老口かげを流れくさりたるくちなすを食くたがる衆（美神 三ノ一）
- ・ 櫻桃色のひかり花たれるじつ／からつかり生えくる天馬驕子（美神 三ノ一）
- ・ 伊達ひ娘まりたつちな響れをじつたり笑つてつ／つ／つ（可き分）
- ・ 塵はじつじつ通れ打つるもの おろしたての修正液の瓶を振るじつ（美神 三ノ一）
- ・ 間違じつじつやがめる書 天候の詩だけしてまた糧を回く
- ・ 「一／三／年／寝／た／た／が／良／い／で／せう、 暮ゆるみゆく内科医の書
- ・ 泣き面に仕 山井のひつちめ ぼろぼろと書の野山を唄りゆくなり

- トタノカセノケト食クテ、春の日の夕暮れば響かす 中野

・ ちろこーとの雑誌読んで寂しいのは社交辞令の態度をよむ  
 作者は詩的感興を懸念にすりくらしつつしているものに思える

くたしまたのびんへスガキもくせい

歌はただ此の世の外の五位の道標的にまじりて 岡井隆



- ・ 邪魔をうける邪魔はいつそりし腕に括めてしまふ作戦

小悪魔的な世界を書くはずが、根本的な愛の欠落がめだち楽しくない

暗みゆく世から我に垂れかかるのれんサイト、いつかなる屋

楽しんではいけぬ

- ・ 魂を見せつけながら走りたり埃まみれのトコロウの中

・ トリストルを手にするときはそのときめきを顔に出したらためよ 先生

・ 走り出せば走るまれる走るのみあらゆる比喩の言葉を離れ

・ 手招きは無意識のつち ひかりつてハダチラカヒトハダチラカヒト

・ 胡麻豆腐ちぢぢ食くて好きなものはかり歌ってしまふ寂して

・ 幾重にも眠つるカーテン 風止まれば風の言葉をやめて眠らむ

・ シェパードのぬくひのやつな飛行機に心を支配されてるふ

「砂の降る教室」といっことは、現代短歌のじよなのではないが、しまり眠るつもりで、詠刀(じよから)を闘わせる土俵であつたはずの現代詩、現代短歌、といふ語そのものの存在をすら、はぐらかしてゆく執拗で悪質な攻撃にさらるア・フ・ア・ン・トリアルの詩的出現は、いすじ、(戦後詩を滅ぼすのが詩の死か)をめぐる八十年代現代詩の論議は、権宜にしてつたつたつとも通り過せとくたさい。「詩的」が象徴する「エニツ」な自分との和解がなされていなければ、無駄に「詩的」の信者たちを採集する行動に出してしまつが、闘つてくまなのは歌壇の「いけななな」ではなく自分の内なる闘争、中野なのではないが、

作者歌人は何から懸念に連れまわっているのか？

- ・ わたしたち全精力で遊ばなまや 微かに囁こてる砂時計  
花柄の娘十人囀りて呼吸吸気選せてる舞台袖
- ・ 鬼たちの心揺らめく季節(と老) なるか山に燦の炎灯りぬ  
ぬお鬼がもつやくこに來るこに來る地底 脚 膝 胃を抜けて  
世阿弥などの芸術の「鬼」が尋求されているように見える。だが、自分を追い詰めることで「リアル」が出現するといつ伊藤比呂美・高谷輝雄的回路が部分的に成功しているの、それ以後そればかりになつてしまつているまらじがある。「春」「夏」の歌はあるけれど「秋」「冬」の歌はほとんどない。トランスが低いといつこつと無気力・不女・抑鬱気分が同一視され、それを「どんどんやる」「怒る」「勝つ」などの単語ハイトランスに自らをかりたてることで強迫的に回避しつこつしているのかも知れない。「全精力で遊ばなまや」は決して楽しくない。「怒りの連鎖」を意を起すもつた、人を嫌う歌はあるけれど嫌われる歌はない。
- ・ シャーペンの捻ひらひらち折りながら怒りトナル口には汗ばま  
君の言つ「嫌い」の底にあるものを図り標ねて夏を終えたり 鑑賞既理子
- ・ 町中の水もどけ分け与くたるウイノウ米り出ち冬の朝  
薔薇とその季節を生きてもろもどけはら時間の水際にはたり 正岡豊

まじめ

身体の外部的な春夏の季節感が、人生の春夏と重なる。そのトランスの記述だけで、どこまで表現の「鬼」を下ろしているのか。春、そして夏を必死で生きなまや、といつ不安感・焦燥感の表現的確さにおいて等身大の現代のモダンリアルの書寫像の表現としてもよく成功。しかし強迫的な「トランス」/「リアル」の回路は秋冬の季をにらしてしても無力だ。それが「勝ちに行く」手段としての文学であるとして、作者自身の表現上の自由屋を最大限に切り開くことに成功。ちなみに今までになかった文体、今までになかった比喩の創出、多くの名作の引用により、じつは扱い方における高い技術的実力を示している。しかし読者にとって、読書のうれしい午後の快楽はいつたいていには保証されるのか。「すじた」ではなく「すばらした」を量擾されるようになるためにはどうしたらよいのか。ポストモダン的な季層の「微差」の追求ではなく、世界の本質をひらひらかえすよこな底力を發揮するところに、ポストモダン後に生きる書年後期の文芸者としての力量と真価が問われるであろう。春夏の木つたつたな「苦じた」をいかに脱構築して、秋冬のおたやかな「楽じた」を獲得するの。その詩的出発に流す注は、決して時代としての文学について無駄にはならないといつ確信がある。

ぬおくかぬま くわらんじやつてつ老のそらに くれひあり

ほるまんくわたの わかものゝつ老あけにまた ぬけるかみ 大岡信